

## おかしちようだい

根内 幅好



「入院してもらいます。手術した方がいいんですけど。」

とある耳鼻咽喉科医院。扁桃腺炎で熱を出し、軽い気持ちでここを訪れた。生まれつき扁桃腺肥大で、子供の頃から年に二、三度はこれで熱を出し、もう慣れっこである。だから先生が「入院」と言った時、冗談だと思っていた。そんな大袈裟なものに、手に渡された紙切れは何度読んでも「入院必要品案内」

生まれた時から連れ添っている、結構愛着のあるヤツであるからして、引き離すことはやめてほしいとお願ひし、「入院」の方だけしぶしぶ承知した。

車に乗っていて、前を走る車に幼い子供を認めると、つい手を振った

りペロペロバーをしてしまうのが、教師の性である。車でなくとも、病院のベッドの上でも、子供を見つけては無意識に手を振ってしまう自分に思わず苦笑する。子供を見ているととても楽しい。入院していると、それが唯一の安らぎとなった。

鈍い銀色の光を放つ治療器具、一面に漂う薬品の匂い、気分を重くする診察室さえ子供の目にはジャングルだ。治療器具からぶらんと垂れ下がっているゴムのチューブも、彼らにかかつては、ジャングルの木に絡まるつたでしかない。診察台は太木だ。女の子がつかを引っぱる。チラチラと横目で気にしながらも、忙しさに手が離せない看護婦さんには、女の子の笑顔はひどく残酷だ。「あつ。診察を待っていた患者の口々から思わず声もれた。「やつぱり、切れた。」皆、同じ思いで同じ所を見ていたのだった。皆の目がそこへ集中している間に、今度は男の子が空になった太木によじ登って、猿のようにはいしゃいでいる。危ないから降りなさい。」付き添ってきた父親も看護婦さんも、一応そう言ってみたものの、逸早く聞く耳持たずと判断した先生は、机の中からおかしを取り出し、「こつちへおいでと誘いをかける。お猿さんは、すんなり餌につられた。退院と言われていた日、近くでけ

たたましく消防車のサイレンがなった。同室のおばあさんが「火事は嫌だ。一度経験してるから。」と言った。私が一言「へえ。」と相槌を打てば、おばあさんはその話題であと一時間はしゃべり続けただろう。しかし、その一言が言えないほど、私は高熱に苦しんだ。病室はそれから二日間静まり返っていた。

## 心に残る言葉

内藤 百合子

暑い夏が来るたびに思い出す言葉があります。

就職して二年目の夏休み、私は、心室中隔欠損症の手術のため、福島医科大学附属病院に入院しました。

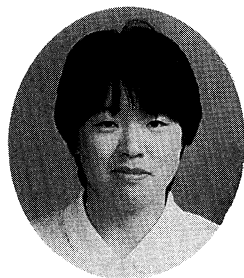
健康だけが取り柄の私でしたが、レントゲン検査で、心肥大と判明、精密検査の結果、左心室と右心室の壁に穴が開いていて、このままでは、出産などの場合心臓に負担がかかりすぎ、危険であると言われたのです。

この手術は、心臓病の中ではごくありふれたもので、成功率も100%に近いといわれています。

しかし、これまで病気などしたこ

入院して一週間がたった。学校の子供たちに会いたくてたまらない。早く治して退院したくて、むずむずしている気持ちを何とかしたくて、診察の時私は思い切つてこう言つた。

「先生、私にもおかしちようだい。」  
(県立会津養護学校教諭)



とのない私にとつて、また、そんな娘を持つた両親にとつては、手術をするということだけでも不安は大きかったのです。特にこの病気が先天性のものであったことから、母は、自分に責任があると思ひ込み、あれこれ思い悩んでおりました。

手術の前日、担当医の星野先生から、手術について具体的な説明を受けました。わかりやすく噛み砕いて方法や手順について話してくださいました。それでも、不安が拭いきれないでいた私たちの気持ちを見過ごされたのか、穏やかな面持ちでこうおっしゃったのです。